

□ 次の二つの詩とその解説を読んで、後の問いに答えなさい。作者は、ともに宗 武志です。

(1)

夕 日

夕日は

杉を

かけのぼる

なげけ 巢の蜂

季節にふれる言葉はないが、①と知れる。①の日はつるべ落とし。燃えるような夕日が沈む直前、杉の木を真っ赤に染めるのを②「とみた。そのへほのお」にあおられて、巢にかたまっていた蜂たちがさわぐ。③

- ① 季節を漢字で記しなさい。
② 詩の中の適当な一語を入れなさい。
③ この詩の鑑賞として、適当なものはどれですか。
ア 瞬間の光景を切り取った簡潔な表現がするどく、あざやかだ。
イ 想像の世界を明るく描いた表現がいきいきとして、かるやかだ。
ウ 風景の変化をとらえたわかりやすい表現が静かで、なごやかだ。
エ 実際の出来事を伝える素直な表現がみずみずしく、さわやかだ。

〔若い人への人生詩集〕より

玉川大学出版会

(2)

ざいざいざいざいざい
しやあん

どろんどろんどろん
どろんどろん どろんどろん

とじやつ ぽん ぷり
とじやつ ぽん ぷり

ぷるとぶ しぷる
ぷる とぶ しぷる

ちやつ ぷる ら
ちやつ ぷる ら

〔注〕
しやあん 〓 シャーン

とじやつ 〓 トジャツ

ちやつ 〓 チャツ

- ① のさまざまな形態を擬②で表そうとしたもの。一つ一つは③を表すだけの③を、つないだり区切ったりして、効果的に用いることで、そのものを、より想像しやすくしている。③表記による日本語の④を読み味わえばよい。

- ① この詩の題名として最も適当なものはどれですか。
ア 雨 イ 波 ウ 雷 エ 風
② ニヶ所に共通する漢字一字を入れなさい。
③ この詩の書き方から、ニヶ所に共通する語を入れなさい。
④ 次のどれが適当ですか。
ア しなやかさ イ 意味深さ ウ ひらめき エ 勢い

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(原文の語句を一部入れかえてあります。)

「冗談も休み休み言え」という言葉がある。それをもじって「マジメも休み休み言え」という雑文を書いたら、かなりの①反響があった。のべつまくなしの②に痛めつけられている人は大分いるらしい。しかし、総じて言うところ、日本にはまだまだマジメな人が多いようだ。日本人の好きな儀式に出席すると、まったく面白くもないマジメなあいさつとやらをやたらに聞かされる。ながながと退屈な話をして「はなはだ簡単ですが」などというので、この人も少しは冗談を言うのかと思うが、本人はマジメくさっているので、どうも③本気で言っているらしい。

日本人はユーモアのセンスにかける、とよく欧米の人に言われる。これはどうしてだろう。そのひとつは、笑いというものが客観性を誘発する性質をもつからではないか、と思われる。式などというものは、その中に「はいっている」からこそマジメにできるところがある。「ナインダソレ」ということになると思わなくて仕方ない。しかし、儀式を執り行っている人でも、参列している人でも、④そこに「はいっている」限り、有り難い感じがしてくる。そんなときに、だれかが外から見て、「ナニヤッテンノ」というと、すべてぶち壊しになる。

日本人は「ウチ」と「ソト」の区別に敏感なので、みな「ウチ」

の中で一体となっているのを笑いによる客観化によって、⑤ぶち壊されるのを嫌う。ただ、すべての「ウチ」の人がばか騒ぎをして笑うときは、一体感が助長されるのでいいが、こんなときは低級な笑いを誘うものが好まれ、ユーモアというものから遠ざかる。

ユーモアは余裕のあるところに生まれる。マジメに考えると、いかりとか戦いとかが起りそうなとき、余裕のある人がユーモアを生み出し、また、適切な冗談によってみな心に余裕が生み出されることもある。しかし、こんなときは極めて微妙で、うっかりすると「ふざけるな!」とおこられたり、なぐられたりさえする。こういう危険を犯しながら笑いを生み出すところに冗談の言い甲斐もある。

冗談による笑いは、世界を開き、これまでと異なる見方を一瞬に導入するような効果をもつことがある。八方ふさがりと思えるとき、笑いが思いがけぬ方向に突破口を開いてくれる。

【語注】誘発：あることが元になって、別のことが発生する
(「日本の名随筆47」 河合隼雄 作品社)

(1) ①「反響があった」の「反響」とはどのようなものですか。
ア 反論 イ 同情 ウ 共感 エ 疑問

(2) ②に文中の適当な語を入れなさい。

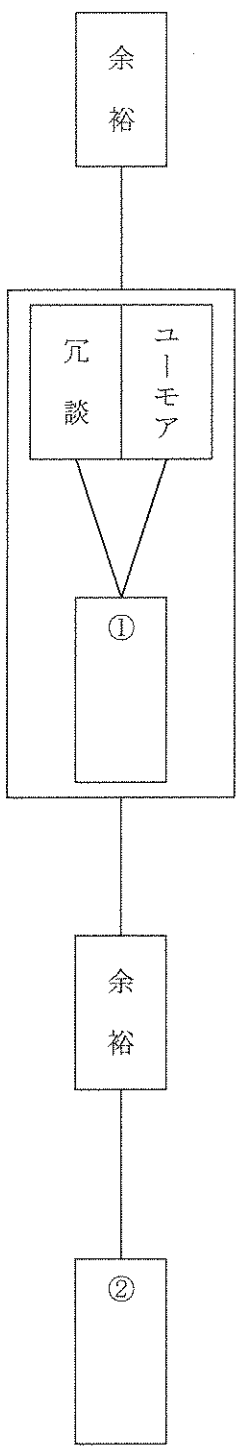
(3) ③「本気で言っているらしい」のは次のどれですか。
ア 「はなはだ簡単ですが」 イ マジメなあいさつ ウ 退屈な話 エ おもしろくない冗談

(4) ④「そこ」は何を指しますか、文中の語で答えなさい。

(5) ⑤、何を「ぶち壊されるのを嫌う」のですか、に文中の語で答えなさい。

をつくり出す

(6) ⑥の部分でいう、冗談の言い甲斐・効果を整理して示すと次のようになります。①・②に⑥の部分から、それぞれ適当な一語を書きぬきなさい。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(原文を一部省略しています)

知覚の働きを十分に發揮させるには注意という仕掛けが必要です。

パツと見てパツとわかればそれにこしたことはありませんが、そううまくはゆきません。意識をその目標に集中する必要があります。つまり、注意を集める必要があります。注意を集中すると、その部分の知覚の力が強くなります。見えなかったところまで見えてくるようになるのです。

よくあげられる例ですが、人ごみの中などで、何か気になる話や声が聞こえてくると、われわれは知らず知らずに耳を a ます。とぎれとぎれ、あるいはかすかにしか聞こえてこない声に注意をしぼろうとします。そうすると不思議なことに今まではただの雑音に近かった音が、一連の意味ある声として拾い出せるのです。

視野の片隅で何かが動きます。とたんにわれわれはその視野の片隅の方へ視線を動かし、注意を向けます。しばらくは何も見えませんが、その方向に何かいるのではないかと、じつと目を凝らします。すると、変な茶色いかたまりが目に入ります。

「あ、ゴキブリめ！」というわけですね。

★
からだのどこかがチクツと痛みます。するとわれわれはからだの動きをしばらく止め、「どこが痛んだのか」の点検に入ります。注意を自分のからだの表面に移すのです。そうすると、小さな蚊かが右の二の腕うでのあたりで、わが貴重な血をすいこんでいるのが目に入るでしょう。

夕暮れ時、街を歩いていると、なんともいえないおいしい匂いが流れてくることがあります。そうなると突然とつぜんわれわれはその匂いを意識を集めてしまいます。鼻を ◎、くんくんと細かく息をし、鼻に流れこむ空気の中身を検討しようとしめます。それがカレーライスの匂いだとわかるまでに時間はかかりません。お母さんが子供たちの大好物を作っているのでしょうか。

対象に向けた注意を一定時間維持するのも注意の働きです。

好きな人といっしょにいれば、その人の **①**

一	二
手	一
一	二
足	一

 に注意が独占され、一時間も数分に感じるかもしれません。注意が長く一定の対象に固定されるのです。しかし、興味が乗らないことには、一分たりとも注意を固定させることは出来ないでしょう。

注意は自然に備わつた心の働きですが、自然にまかせているだけでは、動物的な本能にまかせてゆれ動くだけになります。

数学のきらいな人は先生が黒板に数式を書き始めただけで、頭痛が起こるかもしれません。恋人に注意を持続させるのには努力は要りませんが、黒板の数式に注意を持続させるには意志が必要です。自分にとって大事なこと、自分にとって必要なことを見きわめて、それに向かつて注意を集中し、維持する必要があります。

注意を驅り立てるものは感情です。好奇心と呼ばれる心の動きです。カレーの匂い、目の片隅の動き、気になる声、それらに注意が向かうのは、おや？ 何だ？ という素朴な心の働きです。生理学者は動物に生まれつき備わっている新奇な刺激に注意を向ける働きを「おや何だ」反射と名づけています。おや何だ反射は行動につけられた名前ですが、その行動の源となる心の動きが好奇心です。

意志の力で注意を維持するのはなかなか大変ですが、好きなことだと努力の感情なしに没頭ぼつとう出来ます。好奇心が注意を維持してくれるからです。

⑤ このように、心は ① (おおまかな心の傾向) ↓ 注意 (具
体的な方向づけ) ↓ ② (正確な区別) の流れで働きます。何事
も 好きになることが大事です。 きれいなことには心は働かないの
です。

(山鳥 重『「わかる」とはどういうことか』
ちくま新書)

(1) a c のそれぞれに適当な語をあてはめなさい。(同じものを使つてはいけません)

ア とがらせ イ こらし ウ びくつかせ エ そばだて

(2) I ~ III で使われている感覚は何ですか、例にならつてひらがなで答えなさい。

〔例〕★印の部分は
しよつ
――
覚

(3) ①

一
手
一
足

の □ にそれぞれ漢字を一字入れ、「ごくさいな一つ一つの動作、ふるまい」という意味の語にしないさい。

(4) ————
 (B)
 ①
 ②
 にあてはまる熟語を、①は三字、②は二字でそれぞれ書きぬきなさい。

(5) めもろのよなけつろんが導かれるように、次の文章を完成させなさい。

ただし、①は十二字、③は十七字でそれぞれ文中から書きぬき、②は三十〜三十五字でまとめなさい。

知覚の働きを十分に發揮させるには、注意、すなわち、① 十二字で書きぬき ことが必要である。注意は、自然に備わつた心の働きであり、ゆれ動くものだが、② 三十〜三十五字でまとめる しなくてはならない。注意を意志の力で維持するのは大変だが、③ 十七字で書きぬき できる。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I

けれどまあ、弟たちのいたずらはほかのどれかを傷つけるようなものじゃなかったし、ものをこわしもなかった。ほんの少し、突拍子もなかっただけ。弟はあの夏たしかにくろぐろと焼けていて、花火みたいに元気があった。

ときどき私たちはいっしょにプールへも行った。飛びこみ台から落ちてくるあのこは、まるで海のなかにでもいるみたいにからだをくねらせ、宙返りするその最中、私に笑いかけたようにさえみえたものだった。ほんのさざ波を残して水面に飛びこむと、まわりからばちやばちやと拍手が起きた。ぶらんこよりカンタンだね、と水から顔を出して弟はいった。落ちてくだけたものの、自分でふんばらなくていいんだもの。私、なにいつてんだかわかんなかった。ともだちがきやあきやあ騒ぐのがただひたすら自慢だった。

夏休みのあとの学校は毎日とっても疲れた。④。弟は平気な顔してたけど、休み時間の校庭で、ぶらんこの上がる角度が前よりずいぶん高くなつてたもの、やつぱりからだがむずむずしてたんだと思う。ほとんど水平近くまであのこはぶらんこを持ち上げていた。そんなことできる生徒は上級生ふくめてほかに誰もいなかった。

秋は急に寒くなった。と思うと次の日かんかんでりだつたりした。こりや異常気象だな、と父さんはいった。不吉だね、鳥が西に飛んでくよ、とおばあちゃんはいった。

十月ごろだつたらうか、川のおばけの噂がたちはじめたのは。街の南の端にどぶ川が流れてて、私たちは小さいころから、ぜったいに近づいちゃいけません、ときつくいわれて育った。そこにはいろんなものが流れてくるらしかった。こわれた舟、たべもののかす、手足の取れたぬいぐるみに洗剤、工場排水。はるか上流から、なんだかよくわからないものまで流されるつてきいた。⑤さすがの弟も、川にいたずらをしかけるまではしなかった。私たちにとって川は、現実じゃなく、弟のつくるおはなしよりもさ

らにもっと遠く遠く離れた、触りようのないまっくらなものだつたんだ。

「おばけがでるらしいね」

⑥

学校で急に、みんながそんなことを口にしはじめた。昼夜問わず、いつのまにか郵便局のひさしが破れてたり、自動車のボンネットがへつこんでたり、公園の砂場がえぐられていたりして、そして、そのどのまわりにも、水がぐつしより振りまいてあるんだつて。そこには誰もいない。足跡もなにも、残ってない。ただ、ぐつしよりと、水があるだけ。

「おばけがでるらしいね」

⑦

姿のみえない川のおばけが、その湿ったねばっこい手で、街じゅうのいろんなものをたたきこわして歩いてる。どかん。どかん。そのおそろしい音を実際にきいたこともクラスにはいた。

「なんだかかばそい泣き声みたいなのにつづけて、どかん！ なのよう。庭の鉢植えがめちやくちやになつちやつたの」

はなしながらそのこ、わんわん泣き出してしまった。

おとなたちは、誰のいたずらだろう、と疑った。弟のしわざに決まってる、そうあからさまに名指しするひとまでいた。ばかみたい。あのこはものをこわしたりしやしないのに。弟はだけど腹を立てるでもなく、なんだかじつと考えこんでいて、ある夜、私にこんなことをいったんだ。ふしぎなんだよ、あの川から出てきたんなら、もつときたない、うすよごれた水のはずだろう？

「なに、どういふこと？」

おまわりさんにきいたんだ、と弟はつづけた。おばけがこわした場所に残つてたのは、どれも透明な、澄んだ水だつたつて。いやな匂いもぜんぜんなかったつて。⑧ひよつとすると、川のおばけにもなにかわけがあるのかもね。

次の晩、弟はこの、一冊目のノートの最後にのつてるおはなし

II

をきかせてくれた。そうだ、あれは、ひどく風の強い晩だった。

おばけのなみだ

川のおばけはもう二度と川へはもどれない。それは、ひとがしんだらこのよにもどれないのとおなじです。

川のおばけは、川のなかではいきいきとしていた。こわれたおもちゃやうんちや、しんだどうぶつたちとはなし、わらつたりできた。へどろのついたほそながいいしころを、すきになつて、ふられちゃつたこともある。しゃりんのとれたミニカーとみずごけが、そのときはざんねんかいをしてくれた。みんなおなじ、くろいくろい川のなかの、なかまだつたのです。

「どうしてこんなふうになつちまつたんだらう」

川のおばけはほとんど空気みたいな、とうめいになった、じぶんのからだをみまわしためいきをつきます。いま、おばけは、そらにうかんでる。まわりにはいいしころもがらくたも、どうぶつもだれもいません。なんにも、そこには、ありません。

「あれはたしか、こういうことだった」

⑨あんまりすいめんにちかづいちゃいけないよ、みんなからそういわれて、川のおばけはおおきくなりました。けど、あるひ、きもちのよいあぶらまみれのまっくろなながれに、いきおいよくながされてた川のおばけは、すぐあたまのうえに、⑩みたこともないしらじらしなもの、がみえてくるのにきづきました。ぎつしりと水をおおうごみのあいだから、それはまぶしく、ちらちらとさしこんでいます。おばけはこわくなりましたが、はじめてみる、その、しろいものに、ついふらふらとひ

III

「川のおばけ、⑪をみたことなかったなんて」

私がいうと、弟は黙つてうなずいたつて。

「じゃあ、花壇や植木をこわしちゃうのは……」

そうだね、と弟はこたえた。川の底のねじまがつた水草や、苔を、思いだして泣いてるのかもしれないね。

(いしいしんじ『ぶらんこ乗り』「おばけの涙」新潮社)

アからだが、座ってるってことになかなか慣れないんだ

ウ久しぶりにたくさんの人と話したんだ

ともだちとよく
ない
をしていた弟も……

「私」や弟にとつて、川は①十四字であり、そこからくるといふだけで、おぼけは不気味な存在であつた。そして最初うわさは小さな噂も、事件が多くなるにつれて、②六字 おぼけだからこそ、おそろしさが増していくのだった。

① このことばから、弟についてどのようなことが読み取れますか。

ア川のおぼけは必ずいると信じ、その正体を突き止めようと調査している。

イ川のおばけなんていないとわかつてはいても、おくびよう風に吹かれている

ウ川のおばけの存在を自然に受け入れていて、自分の中で思いをめぐらしている

エ「川のおぼけ」という言葉を使うことで、ものがこわされる騒ぎを楽しんでいる

②「川のおぼけ」の正体について、弟とは対照的な見方もありました。それがわかる一文のはじめの三字を書きぬきなさい

(5) 次の問いは、弟が作った **II** 「おぼけのなみだ」というおぼはなしに関するものです。弟といっしょにおぼはなしを考えるつもりで答えなさい。

①——⑤、弟がこの一文を思いついたのはどういうことですか。それがわかる一文を①から探し、はじめの三字を書きぬきなさい

② ——— (F)で表されるものが、IIIの(F)に入ります。次のどれが適当ですか。

ア 光
イ 雲
ウ 鳥
エ 花びら

③——⑥のような発想は、弟のどのような体験から出たものと思われますか。**I** から二種類あげなさい

④ ☐ H おばけの心情を最もよく表すことばを選びなさい。

ア みんなにあいたい
イ こわい
ウ かえりたい
エ ぼくがいけなかった

(6) **III** の会話から伝わる弟と姉についての適当な文を、二つ選びなさい。

ア 元気でいたずら好きだが、どんなものにも愛情を注ぎ、現実ばなれしたおはなしをつくる弟を、姉は心配している

イ 元気でいたずら好きだが、弟がやわらかな心を持つているとよく知つてゐる姉は、弟のはなしをまつすぐに受け止めようとしてゐる。

ウ 元気でいたずら好きな弟は家族の心配の種であるが、エネルギーにあふれるはなしを考え出すので、姉は頼りにもしている

エ 元気でいたずら好きな弟は、ただ幼くてかわいらしく、いつまでも純真なままでいてほしいと、弟のはなしを優しく聞いている。

オ
元氣でいたずら好きな弟が、弟ならではの発想で考えたはなしを聞かせてくれるのを、姉はいつも心待ちにしている